

「森の幼稚園」試論 —北欧から学ぶわが国の幼稚園への可能性—

“The kindergarten of the wood” essay —For the Japanese kindergarten to learn from Northern Europe—

名須川 知子* 片山 知子** 米澤 正人*** 上垣内 伸子****
NASUKAWA Tomoko KATAYAMA Tomoko YONEZAWA Masato KAMIGAICHI Nobuko
田 爪 宏二***** 富 田 久 枝***** 西 脇 二 葉***** 吉 川 はる奈*****
TAZUME Kouji TOMITA Hisae NISHIWAKI Futaba YOSHIKAWA Haruna

As for this research, I will introduce the kindergarten of the wood in Denmark, and why it is indispensable for children grows. I researched of the specifically the kindergarten of the wood in Denmark, how to apply to the Japanese education. There are places in Japan which are using similar methods. In this environment children are faced with the strictness that surrounds nature and influences children to investigate it. It also gives them clear intentions. It is now necessity for education to grow up in an environment completely surrounded by nature children benefit ever with a small amount of nature in these lives.

本研究は、「森の幼稚園」について、なぜ、子どもたちが育つ場所に森や自然が不可欠なのか。その点について明らかにするために、デンマークの森の幼稚園の実践例やわが国における実践について紹介し、わが国の実践的蓄積を再認識し、持続可能な社会の発展のための幼児教育としての「森の幼稚園」の保育内容としてのあり方を考察した。その結果、わが国の保育では自然的なものが内包化され、かけがえのないものになっていると言えるが、その分保育者の意識にのほりなくいものになり、わざわざ意味を問うことや、価値について改めて考えることなく実践化されているところがある。厳しさを含む自然と対峙することで、何を求め、探ろうとしていくのか、という保育者側の意図を明確にしていくことこそが不可欠なことであり、そのことこそが自然によって、幼児期に生きることの土台を形成するために必要なことになると考える。そして、身近な自然に心を留める保育の実践による「森がなくても森の幼稚園」について提言する。

キーワード：森の幼稚園、デンマーク、自然、幼児教育

Key words : the kindergarten of the wood, Denmark, nature, early childhood education

はじめに

現在、ヨーロッパを中心に、持続可能な社会をつくることを目指して「森の幼稚園」の実践が展開されている⁽¹⁾。森の幼稚園とよばれて紹介されてきた保育はデンマークにその始まりの歴史を持つ。1954年にエラ・フラタウによって創られた。今日もデンマークで森の幼稚園は子どもの保育の場として注目されながら子どもたちを受け入れた保育の場として実践がなされている⁽²⁾。

昨年、世界幼児保育世界会議（OMEP）のスウェーデンでの世界大会に参加した折りに、隣国のデンマーク、コペンハーゲン市で森の幼稚園訪問の機会を得、我々はデンマークにて、その実際に触れることができた⁽³⁾。そして、子どもの遊ぶ姿や生活の様子から、その背後の保育者や大人や社会のもつ自然観を垣間見ることができ

た。

日本に於いても、近年「森の幼稚園」の実践が報告されている⁽⁴⁾。今後の森の幼稚園の発展には、屋外の自然環境を保育に活かすという保育形態に着目するばかりでなく、その地域社会の固有の気候・風土、歴史・文化及び教育観との関連性を踏まえて、進めていくことが欠かせない。なぜ、子どもたちが育つ場所に「森・大自然」が不可欠なのだろうか。その点について、明らかにするために、まず、デンマークの森の幼稚園の実践例を紹介し、その後、わが国における実践について、札幌市にあるT幼稚園及び、西脇市N幼稚園の実践例について考察し、日本の実践的蓄積を再認識し、持続可能な社会の発展のための幼児教育としての「森の幼稚園」の保育内容としてのあり方を考察する。

*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻幼年教育コース **和泉短期大学 ***札幌トモエ幼稚園 ****十文字学園女子大学
*****鹿児島国際大学 *****千葉大学 *****立教女学院短期大学 *****埼玉大学 平成23年10月21日受理

1 デンマークの森の幼稚園

前述したように森の幼稚園はデンマークに始まり同国内だけでなく北欧、ドイツへとその保育は広められた。今日も森の幼稚園は子どもの保育の場として注目されながら実践されている。

デンマークの保育の制度は社会保障法により保護者が希望すればどのような保育でも受けられるように統一され整備されてきた。実際の乳幼児保育は地方自治体によって行われ保護者の様々なニーズにあった多様なものとなっている。森の幼稚園はデンマーク国内の保育施設としては費用を比べると一般の保育施設より高い。保育料への利用者負担は3分の1であるが自治体により些少の違いがある。乳児対象はファミリーデイケア、幼児対象のデイケアという保育システムが紹介される場合、デンマーク語の『こどもの庭』という呼称が保育園、幼稚園どちらにも翻訳では使われている⁽⁵⁾。また、デンマークの保育は早くからフレーベルの影響をうけつつ、それを独自の保育理念に発展させてきた経緯もあり幼稚園との呼び名が大事にされているという背景がある⁽⁶⁾。森の幼稚園といっても森に隣接する住宅地の子どもたちのための施設、森まで車で移動する施設など様々な例が見られる。今回訪問した森の幼稚園は園児数26名でペタゴと呼ばれる保育者が子どもとともに一日森で過ごす保育であった。保育の理念は一人前の人間を育てることであり、そのため森の木々の中で木の枝や自然物を相手に自分の遊びを作りだし、仲間と一緒に過ごす。

本幼稚園は、コペンハーゲンの市内からバスで30分のところにある。園の主任保育者が、私たち訪問者を迎えにきてくれた。駐車場から少し歩くと森への一本道が現れた。その直ぐ脇に背丈ほどの植え込みで囲まれた小さな瓦屋根の小屋がある。この小屋が子どもたちの朝の集合場所であり、毎日ここから8時になると、子どもと保育者で森に出かけていき一日を過ごす。小屋の入り口は小さな木戸が付いており、保護者、子どもへの手書きのお知らせが貼ってあった。それは、『甘いものは蜂が来るので控えようね』と蜂のイラスト入りの内容であった。

園名でもある「クグレネ」とは松ぼっくりの意味で、ホームページには繊細な植物画で松ぼっくりのイラストが描いてある。それによると『森と音楽子どもの庭クグレネ』とあり、ここでの保育は毎日森へ行くこと、自然の中で子どもが育つことの意義や、音楽を大切に作り取り入れている保育であることなどが記されている。運営は私立の会社組織で行われ、いくつかの基金を得ている。管理小屋の借用、森の中で保育の拠点として利用している水も電気もないノルウェー式のログキャビンの寄付を受けていることなどからも多様な支援があることがわかる。さらに、デンマークでは保護者も入る運営委員会を組織し保育にかかわる。一日2回のおやつなどは保護者

が決めて準備することもその働きの1つである⁽⁷⁾。

集合場所である管理小屋の隣は馬が放牧されている牧場で子どもたちは毎日馬との触れ合いを楽しんでいる。森の中の遊び場までは大人の足で10数分かかる。道の左右は大きな樹木が立ち茂り、針葉樹だけの一帯では樹木がまっすぐ並ぶ列ごとにその最も奥まったところの遠くにはトンネルの出口のような明るい所が見える。あの先には何があるのだろうか等、探検・冒険心を呼び覚まされる森の中である。曲がり角に素朴な木の板の看板が立てられ、そこには手書きの黒の文字で「自然子どもの庭クグレネ」とだけ簡単に記されている。



(写真1) 途中の森の様子

林道の傍らに水たまりのような小さな池もみえたが何の柵もない。道の前方に明るい開けた場所が見えてきた。子どもの遊ぶ姿が見える。森の中で遊ぶクグレネの子どもたちだった。入口部分のみ、遊びスペースへの侵入を防ぐためか網が張ってある。その直ぐ脇に雨でも寒くても森で遊ぶ子どもたちのためにログキャビンが1つある。ドアは開けたままで、出入り自由である。電気も水道もない。手を洗うためには水のタンクがあり、小さな洗面器とペーパータオルが用意されていた。室内にはこじんまりとした薪ストーブが一台、部屋の中心となるよう設置されている。焚き付けのための小枝や薪が籠に入っている。長机の一台に子どもの作品が並んでいた。手のひらに収まるくらいの木片や木の皮にカラフルな染めた羊毛と目玉シールを付けた森の妖精であろうか。天井や壁に目を向けるとそこにも子どもたちの作品が飾られている。大きなテントウムシやバッタの作品はダイナミックであり微笑ましい。木を削っただけの素朴な剣（バイキングを思わせる）が入口近くの籠に何本も差し込まれている。子どもはこれも自由に使える遊具の1つとしていた。入口の上の壁には同じように手作りの木製の弓が何本も掛けて飾られている。

ほかに建物はログキャビンから離れたところに小さな板張りのトイレ小屋と砂場脇の物置、屋根のある焚火の

できる東屋。トイレは丸くくり抜いた板張りのベンチ型。大使用であるとのことだが匂いはない。小用は森の中で済ませるようだ。

一人ひとりリュックを背に森に出かけてくる。そのリュックは外にあるベンチに無造作に置いてあった。お弁当の時間までそのままである。

この広く明るい広場には木の枠でつくられた砂場もある。海賊マークの旗が隅に掲げられていた。砂場の先は起伏のある草地の斜面が続きさらにその奥は高い樹木の茂る森になっている。また広場の反対側のはずれには大きな池があり見えている。そこにも囲いはない。危険なところだと子どもたちは知っているので近寄らないとのことであった。子どもを信頼して自由な遊びの場と時間が用意されている森の幼稚園である。

子どもたちは皆外で遊んでいる。子どもたちの服装は野外の活動にふさわしく天候の変化にも対応できるフード付のヤッケとパンツという組み合わせの素材は両具のようでもある。靴は長靴を履いている。それぞれの個性で色合いもカラフルである。

ファイヤースペースが広場の一角にある。そのこの丸く並べられた丸太に腰かけて一人の保育者が小さな斧で20センチほどの木を細く割っている。その一本を一人の子どもの求めに応じて手渡す。受け取った子どもはナイフを使って削り始めた。ほかにもすでに同じことをしている子どもが4人。その中で年少の子どもはリンゴの皮むきを使って一生懸命削っている。子どもたちは静かに黙々と木を削っている。手の使い方は危なげなく慣れている。傍らの保育者たちも静かにそれを見守っている。



(写真2) ナイフで削り剣作り

ナイフでの怪我について質問すると、「危険なことを遠ざけるのではなく、怪我をしたら痛い、だから気を付けて使うようになる。その経験の中で子どもは自分で考えて行動できるようになる。そのような保育が大切だと考えている。」との答えであった。

5歳になると本物のナイフをもらうことができる。それを見学者に見せようというときであった。持ち主の子どもに主任保育者が「君のナイフをお客様に見せてもいいかな」と尋ねたのである。「いいよ」と返事する子どもの隣でもう一人の子どもが「僕のも見せていいよ」と答えていた。何事にも子どもの考えを尊重し、確認する会話のやり取りは興味深い。子どもだからと軽んじられることのない保育である。

しばらくして子どもも保育者も皆ファイヤースペースに集まり歌やお話の活動になる。見学者も一緒にその輪に加わるよう勧められた。夏休みが終わろうとしている時でまだ休暇中の子どもも多い。歌う歌の相談の後、いくつもの歌が小さな太鼓でリズムを取る保育者のリードで次々と歌われていく。



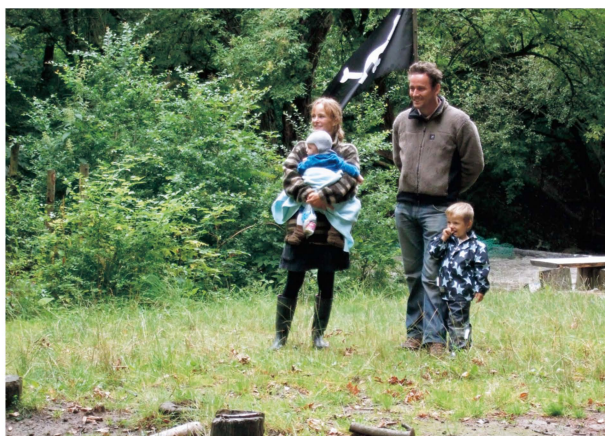
(写真3) 集まって話し合い

歌のあと、夏休みに体験したことを数人の子どもがみんなに話して聞かせる。中にはみんなに見てほしいものを持参して順番に見せて回る子どももいた。保育者の質問で話す内容がさらに引き出されるなどこの活動が子どもにとって話をすること、話を聞くこと等の学びの機会になっている。途中で話を聞く集中がなくなった年少の子どもには隣の保育者が静かに語りかけ一緒に話を聞くよう促す様子も見られた。

その後全員で丸太のベンチから立ち上がって広い草地に移り、体を使ったダンスやリズムの活動を楽器の伴奏なしで行う。歌われた歌の中には筆者らがキャンプソングで親しんだことのある曲もあった。その後、小さくカットしたフルーツ（今日はリンゴ、バナナ、キウイ）のおやつが配られ、そこでは手伝いたい子どもが皆に順番に配っていた。何回かおかわりして満足した子どもたちは再び思い思いの遊びを始める。

森の樹木を利用した滑り台や砦、長いターザンロープで崖渡り、木の剣を使った戦いごっこ、保育者と一緒の太鼓の合図を使った追いかけっこゲーム、見学者も混ざっての遊びがさらに続く。

この日は慣らし保育4日目という子どもが産休中の母親と保育に参加していた。母親の腕にはまだ小さい赤ん坊がいる。明日からは一人で保育に参加するという。



(写真4) 慣らし保育4日目
(右端の男児、両親と共に参加)

一人の保育者が外の机の一か所で絵の具の活動を用意し始めた。活動に加わりたい子どもたちは絵の具用のナイロンでできた長袖スモックを着る。B5程度の紙に思い思いの絵の具作品が出来上がった。

そろそろお腹も減ってきた。ランチボックスを持ち歩き「お昼はまだ？」という子どもも出てくる。見学も終盤、子どもたちは思い思いのところで持参のランチボックスを開けて昼食。中身はハムのサンドイッチ、ニンジン、チーズなど。保育者も子どものそばで水とシンプルなサンドイッチの昼食を一緒に食べる。子どもたちはこの後もまだ森で2時間ほど過ごすのである。

見学終了の時間になり感謝の挨拶の時、主任保育者から彼の手作りによる森の妖精ニッセの絵本を見せてもらう。絵本の読み聞かせも大事なこととしてよく取り扱うそうだ。



(写真5) 森の中で遊ぶうちにトラブルも起こる。

森の中で思い切り走る、登る、ぶら下がる、飛び跳ね

る、手をつなぎ踊る、歌う、そして手仕事を一人前の人間になるために覚える。森ではすべてが満たされる。その森に毎日歩いて行き来する子どもたち。森の保育は人を一人前の人間に育てる保育である。

2. わが国における可能性

(1) 森と共に家族と子どもが育つ保育実践—札幌市T幼稚園

札幌T幼稚園は札幌市南区北の沢の森に囲まれた中に位置し、敷地は7103㎡、園舎は約1053㎡である⁽⁸⁾。教職員は園長の他5名の教諭、1名の事務長である。5クラスである。

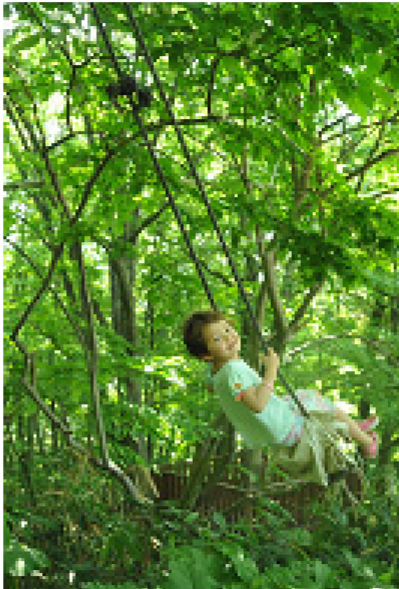


(写真6) 幼稚園とその周辺

幼稚園の目標は、5つあり、「自己の言動を見続けられる人、自己の才能、個性を自ら引き出し養い育てる人、自己の可能性を信じ続ける人、自己理解のために努力する人、人間関係を楽しく創造する人」という教職員としての姿勢が具体的に示されている。本園の特徴は、自然の中に立地していること、そして、家族が参加でき、地域社会から共同体へ育っていくこと、また教員の内、4名が男性スタッフであること、オープンスペースの園舎であり、「自由であること」を大切にしている。しかし、卒園した小学1年生の言葉にあるように、「自由って、何をしてもいいということじゃない。何をしたいのか、何をしちゃいけないのか、自分で考えなくちゃいけないんだ」ということは、周知されているところである。

本園は自然の子どもへの影響力について、まず、感覚への影響として五感に働きかけること、そして、第2に感性への影響として、美しさや心地よさ、畏怖感情等をもつこと、第3に身体への影響として、機敏性、敏捷性、バランス感覚の養成、そして第4に、精神への影響としての癒し、好奇心、忍耐力等、また、第5に認識、思考、想像性への影響から知覚、操作感覚への発達、そして最後に超越感覚への影響から宇宙、神への畏敬を感じることであるとしている。このように、自然の中の様々な要素が人間の体や精神的世界をつくっている、という共通した概念を持っている。

さらに子どもたちを取り巻く環境との関係についても、人工物と自然物に分けられる。人工物は、人間のための存在であり、誰かが所有権をもつものであり、人間の使用が前提の質と構造をもっている。自然物は、自然そのものの存在があり、誰にも所有権がなく、人間の使用とは無関係の質と構造をもっている。前者には命がなく、後者には生命がある。



(写真7)
木の大ブランコ

そのように考えると、「自然」と向き合う時には、対象の性質を変えることはできず、あるがまま受け入れるしかなく、人間が対象に自分を合わせるしかできなくなるのである。自然の中で、このような活動をすることで、子どもたちは知らず知らずのうちにこのような心持ちになり、それが、また、人間に対して向き合うときの基本的態度になっていくのである。



(写真8) 雪(かまくら)の中のブランコ

また、T幼稚園の特徴として、家族ぐるみの実践が挙げられる。これは、母子関係の充実こそが、子どもの育つ要件であることから、親の子ども理解と同時にみんなで子育てしようとする方針をもっている。そこでの母親

の声としては、「子どもは自分の鏡であり、自分の人間性が引き出される」といった母親の自己理解に関することや、「感性が刺激される、人間の本質を考える、純粹でいられる」といった自分への学びに関すること、「支えられている、子ども時代の生き直しをしている、共に成長している」といった自己成長に関することからわかる。このように、人が育つ条件としての人的環境である多様性、群れ、全体性の保障、そして人間関係としての刺激、支え、補い、理解、表現の保障と豊かさの保障、そして自然のもっている雄大さ、不思議さ、美しさ、心地よさといったものが地域社会的共同体的生活環境となっているといえる。子育てという体験を通して人間的に成長した者が、親となった我が子や孫、地域を支えるのである。



(写真9) みんなで裏山の散歩

本幼稚園は子どもが育つ最も重要で適切であり、不可欠な環境として大自然を捉えている。そして、この大自然の力を借りながら、乳幼児期(胎児期も含めて)は多くの刺激と出会い自分探しをすることで、自立した、人に温かい人間が育つという保育理念で保育実践が行われている。この、子どもが、家族が成長する場所が幼稚園であり、子どもだけではなく、お母さんも、お父さんも、きょうだい、祖父母も子育てを分かち合いながら成長する生活の場所としている。

本幼稚園では、本気でけんかをして自分を思い切り出すなかで自分がどのように生きていくのかを多くの人々に見守られながら学んでいく。その子どもの姿を、家族も、そして家族を取り巻く近隣の人々も共に分かち合いながら成長している。もちろん、大自然の中で思う存分遊び、自然の厳しさ、言葉では言い表せない美しさを自分の心と身体を通して、その感覚を高め、より良く生きる、生活する子どもの姿がある。

(2) 森を活用した遊びの保育実践—西脇市N幼稚園

森があるからではなく、森で何をするかということが課題ではないだろうか。そこで、N幼稚園を紹介する⁽⁹⁾。

本園は市の中心に位置し、小高い丘の上にある。園内には大木が林立する起伏ある広大な雑木林がある。注目されることは、四季折々に森と共に遊ぶ子どもの姿がみられることである。森の四季にあわせて、彼らの遊びも変わる。



(写真10) 春の幼稚園

春には、地域の播州織でつくったこいのぼりを泳がせるため、各自が森に枝を探しにいき、小枝にこいのぼりを付ける活動をした。森の中のいろいろな場所でこいのぼりを泳がそうと試み、棒の長さ、風の向き、を考えて泳がせていた。長い棒につけたこいのぼりの方がよく泳ぐことがわかってきた。そのうち、いつのまにか鯛釣りになって友達と“鯛が釣れた”の大合唱になっていた。その際、教師は枝がみつからない子どもには、たくさん落ちてるところをさりげなく教えたり、風と枝の高さの関係していることに気付くような声かけをしたりした。また、安全面では子どもたちの遊びの動線に気をつけて、見守るようにした。



(写真11) 鯉のぼりを枝につける

秋には、剪定した様々な木々を捨てずに集めておき、子どもたちが見えるところに大きな枝をおいておいた。そして、木をみつめてきて、自らが秘密基地をつくれる

ようにした。数人が数日かけて木々の間に基地をつくり、そこからロケットが飛びあがるということにした。どのようにして、ロケットがとぶのか、担任も大変不思議に思ったが、子どもたちは、基地内に座り、カウントダウンをしてゼロになった時に、そこからスタートして4～5人で一列になって、森の斜面を走り回った。まさに、森が宇宙につながるかのような瞬間であった。



(写真12) 秘密基地をつくる

また、大きな木株を叩いたところから枝を吊るした楽器が作られ、枝をフルートに見立てた森の音楽隊も生まれた。このような協同的な体験から自発的な遊びは多くの学びを生み出している。その背後には、子どもたちが森を活用し、遊び込もうとするための、教師のP D C Aを生かした協同性の構築がある。



(写真13) 森の音楽隊
(木を使って演奏をする)

具体的に環境との関わりでみると、4月は園全体の環境を教師や子どもたちが知る事がスタートとなり、そのことが遊びの工夫・発展につながっていく。1学期の遊びを十分にすることで2学期に遊びにつながっていくこと、さらに遊びが大胆になって発展する。1学期に散策した木の実や草花観察の経験も2学期に活用される。教

師も、自然環境にかかわり、遊ぶ方法を熟知することが遊びの工夫、発展につながっている。

子どもたちは、環境の再構成を自分たちで友達と一緒にやってみようとしている。また、その思いを教師や友達同士で伝えあえるようになっていく。それは、事後の話し合いの時間をもつことで、友達の遊びの思い、目的が明確になり、友達同士が共通の目的をもてるようになっていき、さらに工夫が広がっていく。一方、教師は子どもの小さなつぶやきを聞き逃さず、小さな遊びの工夫もしっかり受け止めていくことがまず重要である。森の中での子どもの動線を追いながら、遊びに必要な道具や用具を出すタイミングを見計らうこと、遊びの速度、深まりを十分に把握することが必要となる。そこでは保育者が、チーム保育として、記録をとり、実践からの読み取りを協同的に実施している。

おわりに—森の幼稚園の意味

本来、わが国の保育の史的展開の中でも倉橋惣三の提唱にもあるように、身近な自然や里山といった人がかかわりやすい場を長年つくりあげてきている。わが国では、自然を克服するものとしてではなく、共存するものとしての内在的な意識はあったと言えよう。同様に、わが国の保育では自然的なものが内包化され、かけがえのないものになっていると言えよう。しかしながら、その分保育者の意識にのぼりにくいものになり、わざわざ意味を問うことや、価値について改めて考えることなく実践化されているところがある。

これまで風土の中で工夫して生活をしてきた実態を当たり前として、その価値や意味するところを顧慮することなく過ごしていたものが、国外での「森の幼稚園」ブームともいえるべき状況を垣間見ることで、わが国本来の保育を見直す契機となった。目を転じると、わが国には、緑一杯の山々、四季折々に変化をする身近な自然が存在しており、我々はその様子を「美しい」と感じ、その中に生命力を感じている。これは、生態学的にも根拠があり、健全な森の存在は、人が風土の中で生きることに関係していると言われている⁽¹⁰⁾。

保育の営みもまたそうである。デンマークの森の幼稚園では、基本的に自然享受権に基づいた「自己責任」を幼児期から具体的な活動をとおして実感させていることが伺えた。たとえば、木を削る鋭利なナイフも個人の名前が付してあり、当日の見学者に見せる際も本人の許可を得てからであった。また、お弁当も室内、あるいは森の場所も自分で決めてから食べ始める。札幌市のT幼稚園では、自然の中で、保護者との共同生活体的な生活環境があり、自己の才能を知り、自分を知って仲間と共有する姿勢があった。自由とは、「何でもしていいことではなく、何をして何をしてはいけないのか、自分で決め

ること」という自己決定と自己責任が貫かれていた。西脇市のN幼稚園では、森があるだけではなく、森の中で自分自身が何を求め活動しようとするのか、ということが提示された。わが国の保育においても森の幼稚園という様々な実践が展開されている。しかし、保育形態の問題ではなく、そこで、厳しさを含む自然と対峙することで、何を求め、探ろうとしていくのか、という保育者側の意図を明確にしていくことこそが不可欠なことであろう。そのことこそが自然によって、幼児期に生きることの土台を形成するために必要なことになると考える。そして、壮大な森が周囲にない都会の幼稚園であっても、身近な自然に心を留める保育の実践による「森がなくても森の幼稚園」の試みがなされるべきであろう。すなわち、保育者として、自然の価値を再考することこそが、今問われていることであると考えられる。

今後は、「持続可能な教育」(ESD)としての幼児教育を考える上で、自然環境の意味、価値、そして「森がなくても森の幼稚園」である保育内容をさらに再考していきたい。

註

- (1) P.ヘフナー、佐藤竺；『ドイツ・自然・森の幼稚園—就学前教育における正規の幼稚園の代替物』(公人社2009年)に見られるようにその効果についても詳細に検討されている。
- (2) 同上 pp.24~25
- (3) 平成22年8月、OMEP スウェーデン大会の参加にあわせて OMEP 日本委員会の企画によるデンマークにおける森の幼稚園見学の機会を得た。参加者は3班各1園に分かれ、筆者らはその1つクグレネ森の幼稚園を訪問した。
- (4) わが国の森の幼稚園の実践については、岡部翠；『幼児のための環境教育—スウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」』(新評論2007年) 実践紹介や「森の幼稚園協会」(キープ)等がある。
- (5) 澤渡夏代プラント『デンマークの子育て・子育て』p.99 (大月書店2005年)
- (6) 山田敏『北欧福祉諸国の就学前保育』p.71 (明治図書2007年)
- (7) <http://www.koglernes.dk/>
- (8) 平成23年3月に訪問・インタビューを実施した。
- (9) 平成22年6~11月に訪問・インタビューを実施した。
- (10) <http://www.dongurinokai.or.jp> (NPO どんぐりの会)
(本研究は、平成23年5月第64回日本保育学会でシンポジウムを実施した。)